

## ヤハズトウヒレン群の分類

会長 勝山 輝男

会報 247 号で浅間山系のトウミトウヒレン *Saussurea mihoko-kawakamiana* Kadota について書きましたが、改訂新版日本の野生植物ではトウミトウヒレンを含むヤハズヒゴタイ群の分類が大きく変わっているので、これまでの分類も含めて紹介します。トウミトウヒレン、ヤハズヒゴタイ、キンブヒゴタイの頭花の図は会報 247 号を参照ください。

ヤハズヒゴタイ *S. triptera* Maxim. は、富士山で採集された標本に基づき記載されました (Maximowicz, 1874)。総苞は長さ 10~13mm、幅 5~7mm で、総苞片は 5~6 列で先が短く尾状に尖り、茎の翼はよく発達し、葉は三角状卵形で側方の湾入はあつたりなかったりします。富士山の 5 合目の森林限界周辺の林縁や草地に見られます。

南アルプスや八ヶ岳の亜高山~高山帯には花序につく頭花の数が少なく、葉が狭卵形で縁に粗い鋸歯のあるものがあります。この植物は武田久吉 (Takeda, 1910) により *S. kaimontana* Takeda として記載され、比較的大型のものはミヤマヒゴタイ form. *major* Takeda、小型のものはタカネヒゴタイ form. *minor* Takeda とされました。

また、日本や東北アジアのトウヒレン属を研究した中井猛之進 (Nakai, 1931) は南アルプスや八ヶ岳の高山砂礫地に生え、きわめて背が低く、頭花が大きく 1 個だけのものをシラネヒゴタイ *S. kaialpina* Nakai、奥秩父にあるミヤマヒゴタイに似たもので、頭花の柄が長く、総苞が小型で細長く、総苞外片が短いものをキンブヒゴタイ *S. kinbuensis* Nakai、丹沢などのブナ帯に生えるものをタンザワヒゴタイ *S. hisauchii* Nakai として記載しました。

キク科植物の研究で知られる京都大学の北村四郎は、これらの植物をヤハズヒゴタイ *S. triptera* 1 種にまとめ、ヤハズヒゴタイ *S. triptera* var. *triptera*; ミヤマヒゴタイ var. *major* (Takeda) Kitam.; タカネヒゴタイ (キンブヒゴタイを含む) var. *minor* (Takeda) Kitam.; シラネヒゴタイ var. *kaialpina* (Nakai) Kitam.; タンザワヒゴタイ var. *hisauchii* (Nakai) Kitam. の 5 変種に分類しました (Kitamura, 1937)。その後、日本の図鑑類ではこの分類が用いられてきました。

丹沢、箱根金時山、愛鷹山に分布するタンザワヒゴタイは総苞片の先が尾状に尖らず鋭頭で、ヤハズヒゴタイの他の変種とは明らかに区別でき、神奈川県植物誌 2001 や 2018 でも独立種 *S. hisauchii* にしました。

改訂新版日本の野生植物ではヤハズヒゴタイ *S. triptera*、タカネヒゴタイ *S. kaimontana*、シラネヒゴタイ *S. kaialpina*、タンザワヒゴタイ *S. hisauchii* がそれぞれ独立種とされ、キンブヒゴタイ *S. kinbuensis* が新たに区別され、浅間山系のトウミトウヒレン *S. mihoko-kawakamiana* が加わりました。

典型的なヤハズヒゴタイの分布は富士山とその周辺に限られます。頭花の数は比較的多く柄は短く、総苞片の先は尾状に短く尖り、総苞外片は短く内片の 1/4 程度です。

南アルプスや八ヶ岳のものは亜高山帯のミヤマヒゴタイから高山帯のタカネヒゴタイやシラネヒゴタイまで一連のものと思います。頭花の柄は短く、総苞片の先は尾状に太く長く尖り、総苞外片は内片の 1/2 以上あり、総苞は頭花の数が少なくなると大きくなります。シラネヒゴタイは高山砂礫地に生えた極端型で頭花が 1 個になったものと思います。ミヤマヒゴタイはタカネヒゴタイに統合されて良いのですが、頭花が 2 個のものなど、シラネヒゴタイとの区別では悩まされそうです。タカネヒゴタイの記録が富士山にあるそうですが、少なくとも現存していません。

キンブヒゴタイは奥秩父から大菩薩連嶺あたりまで分布するもので、頭花の柄が長く、総苞が小型で細長いほか、総苞外片は短く、片の先が針状に長く伸びます。

## 文献

- Kitamura, S., 1937. *Compositae Japonicae II*. Mem. Coll. Sci. Kyoto Imp. Univ., Ser. B, 13: 1-421.
- Maximowicz, C. J., 1874. *Diagnoses plantarum novarum Japoniae et Manshuriae* 17-18. Acad. Imp. Sci. Saint-Petersbourg, 19: 475-540.
- Nakai, T., 1931. *Contributio ad Cognitionem Generis Saussurea Japonico-Koreana*. Bot. Mag. Tokyo, 45: 513-524.
- Takeda, H., 1910. *Notul a ad Plantas novas vel minus cognitatas Japonia*. Bot. Mag. Tokyo, 24: 61-70.